翻刻『源氏物語古註』（三十五）――わかな下（その二）――

（山口県文書館蔵　右田毛利家伝来細川幽斎自筆本）

熊本守雄

凡例

一、本稿は、山口県文書館蔵の右田毛利家伝来、細川幽斎自筆『源氏物語古註』（仮称。あるいは『源氏物語抄』と称すべきか。天理図書館ならびに京都大学に分蔵されている菊亭家旧蔵本では『源氏物語抄』とある。細川幽斎が慶長五年当時在住せし丹後田辺城を石田三成に攻囲させられた際に、智仁親王の許に献呈しようとした書の中に見えている『源氏物語抄』が、この右田毛利家伝来本であるかもしれない）の「わかな下」一帖を、翻刻したものである。ただし、掲載紙面の都合で、二回に分載した。

二、「わかな下」一帖は、六括りより成る。即ち、料紙を何枚か重ねて二つ折にした括りが、全部で六括りある。

第一括　料紙七枚十四葉（その内、端一丁は前表紙の見返しとして使われており、墨付は十三丁）

第二括　料紙七枚十四葉

第三括　料紙七枚十四葉

第四括　料紙七枚十四葉

第五括　料紙七枚十四葉

第六括　料紙四枚八葉（その内、遊紙一丁、更に端一丁は後表紙の見返しとして使われており、墨付は六丁）

料紙七十八葉の内、墨付は七十五丁、百五十面に及んでいる。

三、翻字にあたっては、できるだけ原本に添いながらも、次の諸点において、一部手を加えた。

1　注釈の項目（見出しの本文）即ち、源氏物語の本文には、読解の便を考えて、「　」を付し、示した。

2　原本にはないが、読みやすくすることを目的として、注釈の本文に、仮に、句読点を旋し、又、私意により、濁点表記を加えた。

3　原本の本文丁数（墨付丁数）を示すため、各面の終わりに、〈1オ〉〈1ウ〉〈2オ〉〈2ウ〉などの記号をつけた。

4　原本では、注釈の本文の各項毎に（その冒頭に）、「一、」を記して、注釈を加えることを普通とするが、ま、改行して項目を立てながらも、「一、」のない場合がある。そうした項目の場合には、(一)と、かっこを付して示した。

5　現行の活字の範囲内で、可能な限り、原本の字体を再現する努力はしたが、異体文字・変体仮名は現行の活字の字体に改めた。仮名遣いや送り仮名は原本の通りである。

6　本書に疑問のある箇所及びミスプリントと誤認されやすい箇所等には、（マヽ）と記した。

一、「いかに〳〵」とハ、かしハ木より日〻にいかゞと小侍従せめられこうじて、と「こうじて」ハ、くたびれて也。さるべきおりをうかゞひつけて、かしハ木にせうそこしたる也。

一、「よろこびながら」とハ、よろこびのまゝにやつれてしのびおハする也。かしハ木わが心ながらいとけしからぬ事なれば、けちかく見たてまつらバ、思ひみだるゝこともまさるべきとまでハ思ひもよらず、たゞほのかに、御ぞのつまばかりを見奉りし春のゆふべの御ありさま、よとゝもに思出（おもひいで）られ給ふ御ありさまを、けちかくて見たてまつり、おもふ事を申しらせば、御ふミのかへりごとをもミせ給ひ、あハれともやおぼす、とぞおもへると也。

一、「みそぎ」とハ、かもの御けい、あすといふよ也。「御けい」とハ、みそぎ也。

一、「斎院（さいゐん）に」とハ、女三のミやよりさいゐん奉（マヽ）り給ふ女房たち也。これハ人給ひの車（くるま）にのせ給ふ女房たち也。さいゐん、たれともなし。

一、十二人、ことに上らうにハあらぬ女ばうたち也。物ぬひなどするとあれば、〈41ウ〉げにも上らうならぬと也。「けさうしつゝ」とハ、かほつくりなどして、まつりミんのいでたちする也。「御まへのかた」とハ、女三のミやのおまへ人すくなき也。

一、「源中将（げんちうじやう）、せめて」とハ、女三のミやちかくさぶらうあぜちのきミといへる女ばうも、げん中将といへるおとこ、せめてよびいでたる也。

一、たゞ此小侍従ばかり、女三のミやの御まへちかくさぶらうなり。

一、ミちやうのひんがしおもてのおましのはしに、かしハ木よびいれたる也。

一、「ミやハなに心なく」とハ、女三のミやハおほとのごもりけるに、おとこのけハひすれば、源氏のおハするとおぼしたる。かしハ木よりてゆかのしもにゐだきおろし奉るに、物にをそハるゝかと女三のミやめミあげ給へれば、あらぬ人也。「きゝもしらぬ事」とハ、かしハ木おもふ事かたりけるを、きゝしらぬと女三のミやおぼして、むくつけくなりて、人めせど、きゝつけてまいるもなき也。女三のミや、水（ミヅ）やうにあせもながるゝ也。〈42オ〉

一、かずならぬ身ながら、いとかくおぼしくだすべき身とハおもはぬと、かしハ木むかしより心かけ奉りしを、心にこめてやミにしかバ、中〳〵かやうにかなしくハあるまじきを、院にもきこしめされて、もてはなれずの給ハせしときゝてたのミかけて、一きハかずならぬゆへこそうごかしそめし心しづめがたくて、かばかりつらくも、あハれにもおもふ心を、せきかねて、おほけなきすがたを御らんぜられぬるも、はづかしけれ。つミおもき心はさらに侍るまじきといふに、かしハ木とおぼすに、いとめざましきと女三のミやおぼす也。「つミおもき」とハ、実事（じちじ）ハすまじきの心也。

一、「いとことハりなれど」ゝハ、いらへし給ハぬハ、女三のミやのことハりとおもへども、「よにためしなき」とハ、密懐（みつくわい）ためしなきことにてもあらずとおぼしめしなせ、とかしハ木の給ふ也。

一、「中〳〵ひたぶるなる心も」とハ、なさけなくいらへだにし給ハずは、〈42ウ〉ゐてかくし奉りて、わが身もあとなくならん、又あハれとだにの給ハせんをきゝ侍らば、それをなぐさめにてまかでなんと、よろづにかしは木申給ふ也。よそに思やりし時ハ、なれ〳〵しくみえ奉らんハ、はづかしからんとをしはかりしに、たがひてはづかし

げにもあらで、やハ〳〵とのミみえ給へり。あてにおぼゆることぞ人にゝさせ給ハざりける。「あてに」とハ、けかく貴人といへる心也。さかしくおもひしづむる心もうせて、いづちも〳〵ゐてかくして、わが身もよになきさまにならんとまでぞ思ふと也。

一、たゞいさゝかまどろめるゆめに、此てならしたるねこをゐてきて、女三のミやにたてまつるとおもふを、なにしに奉らんとみるほどに、ゆめハさめたると也。

一、「ミやハ」とは、女三のミやハ、うつゝともおぼえず、むねふたがりておぼししほるゝ也。

一、なを、かくのがれぬすくせとおぼしなせと、かしハ木なぐさめての給ふ也。〈43オ〉

一、「ミづからの心ながら」とハ、かしハ木、わが心ながら、うつゝとハおぼえ侍らぬ。かのねこのつなにて、みすのつまひきあげしゆふべより、心にしミて御おもかげおぼえしより、たましゐもうかれておぼえつるとかしハ木の給ふ也。

一、「げにさはた」とハ、女三のミやもさありしとくちおしきちぎりとおぼすに、身のうき事かぎりなきと也。「院にも」とハ、源氏にも、いまはいかでみえ奉らんと、かなしくおぼしてなき給ふ也。

一、「人の御なミだ」とハ、女三のミやのなげき給ふなミだをのごふそでハ、いとゞ露けさのミまさるに、あけゆくけしきなれど、いでかたなく、かしハ木まどひ給へる也。いミじくにくませ給へば、たゞ一こゑ御ことのはきかせ給へ、よろづにいひなやますも、うるさくわびしければ、物いはんとし給へど、さらにいはれ給ハぬ也。

一、はて〳〵はむくつけくこそなり侍れ、又かゝるやうハあらじと、かしハぎの給ふ也。〈43ウ〉

一、「さらば、ふようなんめり」とハ、物もの給ハで、にくミ給ふ心をもちいず、御心をやぶりて、ゐてもかくし奉らんと、かしハ木の給ふ也。不用也。もちいず也。

一、「身をいたづらにやハなしはてぬ」とハ、恋じにせじとてこそ、かくまでも見たてまつらんとしのびより侍れ。こよひにいのちかぎりになり侍らんもかなしきに、露ばかり御心ゆるして一こともの給ハせば、それにいのちかへたるとも思ひなして、身すて侍らんとて、かきゐだきていづるに、はてハいかにしきこゆるかと、女三のミやあきれておハする也。

一、すミのまの屏風をひきひろげてみれバ、よべいりし戸のまだあきながらあるに、「あけぐれのほどなるべし」とハ、よのあけても、まだくらきをあけぐれといふ也。ほのかに女三のミやのかたちを見たてまつらんとかしハ木おもひて、かうしやをらひきあげて、かうつらき御心に、うつし心もうせて侍る。心のどめよとおぼされば、あハれとだにの給〈44オ〉ハせよといふに、めづらかなりとおぼして、物いはんと女三のミやおぼせど、うちわなゝき給て、おさなげなるさまなり。たゞあけによはあけたれば、かしハ木も心あハたゝしくて、ゆめがたりもきこえさすべきを、かくにくませ給へばとて、さりとも、いまおぼしあハせんとて、たちいで給ふあけくれ、秋のそらよりも心づくしなり。「おぼしあハせん」とは、ねこをたてまつるとみしゆめ、くハいにんあらんの心也。

一、「おきてゆくそらもしられぬあけぐれにいづくの露のかゝるそでなり」、「そらもしられぬあけぐれ」とハ、なミだにくれて、よはあけても、心くらき心也。此哥ハてにはあハぬやうなるハかしハ木心まどひてかやうなると也。たゞし、心ありといへり。「ひきいでゝ」とハ、そでひきいでゝうれへきこゆれバ、いでんとするに、なぐさめてよミ給ふ也。

一、「あけぐれのそらにうき身ハきえななんゆめなりけりとみても〈44ウ〉やむべく」、なみだにくれたるまぎれに、身ハきえはてよかしと、

女三のミやよミ給ふこゑを、きゝさすやうにていでぬる、玉しゐハ、身をはなれてとまりぬる心ちすると也。引哥、あかざりしそでの中にやいりにけんわが玉しゐのなき心ちする。

一、「女のミやの御もとにも」とは、女二の宮の御かたにもわたり給ハで、かしハ木内府のかたへしのびておハして、うちふしたれど、めもあハぬと也。

一、「ミつる夢の」とハ、ねこを女三のミやにたてまつらんとみしゆめ也。

一、「いみじきあやまちしつる」とハ、女三のミやをかしたてまつりしハ、あさからぬあやまちなれば、よに心やすくあらん事もまばゆくをそろしくかしハ木おぼしなりたる也。大空もはづかしきと也。

一、「をんなの御ため」とは、女三のミやの御ためハいふにをよバず、わがためにもいとあるまじき事の中にも、むくつけくおぼゆれば、よにもいでゝありき給ハぬ也。みかどのきさきなどにとりあやまりて、〈45オ〉よのきこえあり。勅勘などありとも、身のいたづらにならんハくるしくもおぼゆまじきを、これハいちしるきつミにハをこなハれずとも、源氏にめをそばめられたてまつりてハ、をそろしくはづかしからんとおぼゆる、とかしハ木おもひわび給ふ也。

一、「かぎりなきをんなときこゆれど」ゝハ、きさきなどゝきこゆれど、「すこしよづきたる」とハ、おとこ心おハしまし好色心まじりて、うへハ貞女めき、こめかしげなれど、したの心あた〳〵しきハ、とあることかゝる事にうちなびき、おとこに心かハし給ふたぐひもあるべけれど、この女三のミやはひたおもむきに物おぢし給へる御心にて、たゞいまも人の見きゝつけたるやうに、まばゆくはづかしとおぼして、あかき所にだにゐざりいで給ハず、くちをしく身にきずをつけたるとおぼししらるゝ也。

一、「なやましげに」とハ、女三の宮なやましきとて、おきもあがり給〈45ウ〉ハぬときゝ給て、源氏ハ御心をつくし給ふ事にうちそへて、又いかにおハしまさんとをどろきて、わたり給へり。

一、「そこはかとくるしげなる事も」とハ、女三のミやハさしてくるしげにもみえ給ハねど、はぢらひて、さやかにも源氏にめをあハせ給ハず。源氏ハ此ごろひさしかりつるとだえをうらみ給ふとおぼすに、いとをしくて、むらさきのうへのわづらひざまなどかたり給ふ也。

一、「いまハのとぢめにも」とハ、紫の上なくなり給はんとぢめにやあらん、をろかにおもハれじとて、いハけなくおハせしほどよりおぼしたてゝ、みはなちがたければ、よろづをしらぬさまにあつかひすぐす也。此ほどすぎば、見なをし給ふほど心ざしを見せたてまつらんなど源氏の給ふ也。「とぢめ」とハ、物のきハをいふ也。

一、「かくけしきもしり給はぬ」とハ、かしハ木の密契を、源氏のけし〈46オ〉きもしり給ハぬを、いとをしと女三のミやおぼして、人しれずなみだをながし給へる也。「かんのきミハ」とは、かしハ木ハ、おきふしくらしわびつゝ、かもまつりの日などハ、物ミにゆくきんだちの、いひそゝのかし給へど、なやましきとて、いで給ハず。「女ミやをば」とハ、女二のミやをば、かしこまりをきて、おさ〳〵うちとけても見えたてまつらず、わがかたにのミゐ給ふ。一条の宮にてのわがかた也。つれ〴〵とながめゐ給へるに、わらハべのもたるあふひをかしハ木ミ給てよめる。

一、「くやしくぞつミおかしけるあふ草かミのゆるせるかざしならぬに」、心ハ、女三の宮くやしくおかし奉りたる、源氏のゆるしなきにと、女三のミやをあふひによせて也。あふひも、まつりの日ばかり、神よりゆるされてかざす也。「よの中しづかならぬくるまのをと」ゝは、まつりミにゆきかふくるまのをときゝても、かしハ木つれ〴〵くらし〈46ウ〉がたくおぼす也。「をんなミやも、かゝるけしき」とハ、かしハ木の物おもハしきけしきハ、女二の宮も見しられ給へど、な

にごとゝハしらず、たゞはづかしとめざましくぞ物おもハしくおぼされける。女房たちハまつりミにいでゝ、つれ〴〵なれば、うちながめて、さうのことかきならしておハするけハひハ、さすがにあてになまめかし。「いまひときハをよバす」とは、女三のミやにをよバぬすくせとかしハ木おぼす也。

一、「もろかづらおちばをなにゝひろひけんなハむつましきかざしなれども」、心、女二のミやなにゝちぎりけん、女三のミやにむつまじき御はらからなれどもと也。あふひを、もろかづら、もろはぐさといへる也。「おちば」とハ、おとりばらをいへる也。落胤腹といへる心也。又、きやうだいをおなじかざしといへる也。「かきすさび」とハ、かしハ木、このうたをかきて見ゐ給へるハ、なめげなるしりうごとゝ也。「なめげ〈47オ〉なる」とハ、無礼なると也。「しりうごと」ゝは、かげごと也。後言也。

一、「おとゞのきミハ」とは、源氏ハ、まれに女三のミやの御かたにおハしましたれば、たちかへり給ハで、しづ心なく紫の上をおぼすに、たえ入給ぬるとて、人〻まいりたれば、なに事もおぼしわかれず、御心もくれてわたり給ふ。「かの院のほとり」とハ、二条院のおほぢまで人たちさハぎたり。「とのゝうち」とハ、院中、なきのゝしるこゑゑ、「まが〳〵し」とハ、いま〳〵しき也。「おほぢ」とハ、おほみち也。大路とかく也。

一、「われにもあらで入給ふ」とハ、源氏わが心のやうにもなくて入給ふ也。

一、日ごろハむらさきのうへいさゝか心ちよくみえ給しに、にわかにかくたえ入給たるとて、われもをくれたてまつらじと、なきまどふ也。御すほうのだんこぼちて、そうなどもいづる也。「さるべきかざり」とは、御さうそうまでもみ奉らんとおもふそう〈47ウ〉などばかりたちとまりたると也。みな人ほろ〳〵といでさハぐを、源氏見給て、いまハかぎりとおぼしはつるに、かなしさたぐひなきと也。さりとも物のけのするわざにこそあらめ、いとひたぶるになさハぎそ、いよ〳〵願などをたてそへ給ふ也。すぐれたるげんざめして、かぎりあるいのちにて此よつき給ふとも、いま一たびいきかへり給へ、といのらせ給へる也。

一、「不動の御もとのちかひ」とハ、正報盡者、能延二六月一住。三蔵死後に第灌頂をうけずして、不動に願をたてゝいのりければ、三蔵よミがへり給て、寿命長久なりしといへり。

一、「その日かず」とハ、六月をだにかけとゞめ給へと、不動にいのる也。

一、「院も」とハ、源氏も、いま一たびめを見あハせ給へ、いとあへなくかぎりつらんほどを、見ずなりにし事とおぼしまどへるさま、源氏もいき〈48オ〉とまり給ふまじきけしきなると也。「あへなき」ハ、ほどなき心也。

一、「いミじき御心のうち」とハ、源氏のなげき給ふ心を、ほとけも見給ふにや、物のけあらハれて、ちいさきわらハにうつりて、よバゝりのゝしるほどに、いきいで給へる也。「てうせられて」とハ、てうぶくせられて人ハミなさりね。源氏ひと所の御みゝにきこえんとて、をのれをてうぶくしわびさせ給へるなさけなければ、おなじくハおぼししらせんと思ひつれど、身をくだきておぼしまどへるをみ奉れば、いまこそいミじき身をうけたれ、いにしへの心のこりてこそかくまでまいりきたれ。源氏の心くるしくおぼしまどふを見すぐさで、あらハれぬるとて、かミをふりわけてなくさま、むかしあふひのうへにつき給ひ、物のけのさまとみえたる也。むくつけくおぼししミにし御息所の心のかハらぬもゆゝしければ、此わらハのてをとらへて、さまあしくもせさせ給ハず。その人か。よからぬきつねな〈48ウ〉どのたハぶれたるが、なき人のおもてぶせなる事をいひいでゝ、名

をくださんとやすらん。まことの名のりせよ。又、人のしらざらんことをいへ。さて、いさゝかにてもしんずべきとの給へば、ほろ〳〵となきて、

一、「わが身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれするきミハきミなり」、いとつらし〳〵となく物から、さすがに物はぢしたるけハひかハらざる也。いとうとましく心うければ、物いハせじとおぼす也。「わが身こそあらぬさま」とハ、われこそなき人となりつれども、源氏ハもとのげんじにておハしそらおぼれし給へるこそにくけれと也。「そらおぼれ」とハ、しりたることをしらがほなるをいふ也。

一、「中宮の御事にても」とハ、中宮をもりもち給ふハうれしく、あまかけりても見たてまつれど、みちことになりぬれば、子のうへもふかくおもひ侍らぬ。ミづからつらしと思ひししうしんとまる物なれば、その中に〈49オ〉も、いきてのよに、人よりおとしておぼしたりしよりも、おもふどちの御物がたりのつゐでに、にくかりしさまにの給ひいでたりしが、いとうらめしかりし。いまハたゞなきにおぼしゆるして、こと人のいひおとさんをもはぶきかくし給へとこそおもへ、とうちおもひしばかりになん、かくをそろしくなりたる身のけハひなれば、かくうらミの心もつよくミゆると御息所の給ふ也。鬼になり給たるゆへにふかくたゝり給ふの心也。「この人を」とハ、むらさきのうへを、ふかくにくしとハおもハぬ、とミやす所のれいこんの給ふ也。

一、「まもりつよくて」とハ、源氏ハほとけかミのまもりつよくて、御あたりちかくもよりつかれぬゆへに、御こゑをきく事さへほのかなるとの給ふ也。いまは此つミかろむばかりのわざをせさせ給へ。ずほうど経とのゝしる事も、身ハくるしきほのほとまつハれて、さらにたうとき事どもきこえねば、いとかなしきとの給ふ也。大般若讀誦すれば、邪氣足を焼損〈49ウ〉よし、稲荷明神貞崇法師につげ給しと也。

一、中宮にも、ゆめ〳〵、ミやづかへのほどに、人にきしろふ心つかひし給ふな、と物のけの給ふ也。斎宮におハしましししろの、御つミかろむばかりの事をし給へと、くどくの事をせさせ給へ、とミやす所のれいこんの給ふ也。

一、物のけにむかひて物がたりし給ハんもかたハらいたければ、人に又うつり給ハぬやうに、ふんじこめて、しのびて、むらさきのうへを、ことかたにわたしたてまつり給へる也。

一、「かくうせ給けり」とハ、むらさきのうへなくなり給けり、とよの中にみちて御とぶらひにまいり給ふ人〻あるを、ゆゝしく源氏おぼす也。

一、「けふのかへさ見に」とは、かものまつりのかへさ見にいで給し人〻、かへり給ふみちに、むらさきのうへうせ給へるよし申せば、かなしき事にもあるかな。いけるかひありつるさいはひ人のひかりうしなひたる日にて、雨ハそを〈50オ〉ふるなりけりと、うちつけごとし給ふ人もあり。「なにをさくらにといふ」、引哥、まてといふにちらでしとまる物ならばなにをさくらにおもひまさまし、さくらもよにすぐれたる花なればあたなると也。むらさきのうへもよにすぐれ給し人なれば、かくうせ給たると人〻の給ふ也。

一、「いまこそ二品のミや」とハ、むらさきのうへかくれ給たれば、女三の宮の御おぼえまさり給ハんと、うちさゝめき給ふ人〻ある也。

一、「衛門督も」とハ、かしハ木も、きのふくらしがたかりしとて、けふハ左大弁・頭宰相などいふ御おとうと、くるまのおくにのせてかへさ見にいで給へるに、むらさきのうへうせ給へるよしいふをきゝて、「なにうきよに」、引哥、ちればこそいとゞさくらハめでたけれうきよになにかひさしかるべき、とかしハ木ひとりごちて、六条院

にみなまいり給ふ。たしかにむらさきのかくれ給たりとも、きかでハと、たゞ大かたの御とぶらひ〈50ウ〉にまいり給ふ也。「式部卿の宮も」とハ、むらさきのうへのちゝ式部卿のミやも、いたくおぼしほれて、入給ふ也。「大将の」とハ、夕ぎりの、なみだをしのごひていで給へるに、ゆゝしく人申つれば、しんじがたき事にて、たゞひさしき御なやミをなげきて、まいりつると、かしハ木の給ふ也。いとおもくなりて、月日へ給へるを、このあかつきよりたえ入給へるを、物のけのしたるわざにて、やう〳〵いきいで給ふやうにきゝなして、いまなん人〻心しづむれど、まだたのもしげなし、と夕ぎりの給ふ也。めもすこしはれたるやうにな給たるを見て、かしハ木、わが心ならひに、夕ぎりのまゝ母の御事をいたく心しめてみえ給ふハいかなるぞと、めをとゞめてあやしがり給ふ也。むらさきのうへにけさう心や夕ぎりありつらんとおぼす也。

一、これかれまいり給へるよし源氏きこしめして、おもきびやうざの、にわかにとぢめつるやうなりし、女ばうの心もおさめざりしに、ミづからもえ〈51オ〉心のどめず、あハたゝしきほどにてなん、ことさらに、かく物し給しよろこびハ、きこゆべきとの給へる也。「かんのきミ」とハ、かしハ木、かゝるおりのらうろうならずハ、えまいるまじく、おぼす也。「らうろう」ハ、かゝるをどろきさハぎならずハ、まいるまじく、はづかしとかしハ木おぼす也。

一、「かへさ見に」とハ、むかしハかものまつりの日あまり人おほくて、その日ハかへりはてずして、翌日かへるを見物せし也。

一、「はらぎたなき」とハ、人をあしかれとおもふ心也。黒心とかける也。

一、「かく、いきいで給てのちも」とハ、むらさきのうへいきいで給てのちも、をそろしとおぼして、いミじくたうとき法どもつくして、をこなハせ給へる也。

一、「うつし人にて」とハ、ミやす所いきておハせし時だに心をそろしかりし人の、「あやしき物のさまに」とハ、のちのよにてハ鬼のごとくなり給へらんとおぼしやるに、心うくおぼして、中宮を御むすめのやうにあつかひ〈51ウ〉給ふさへ源氏心うくおぼす也。「うつし人」と、いきて現在にある人也。

一、「かの又人もきかざりし」とハ、むらさきのうへとふたり、ミやす所の御事をかたり給しことを、よりましのいひたるを、わづらハしくおぼさる。

一、「ミぐしおろしてん」とハ、むらさきの上、あまにならんとの給ふ也。「いむことのちから」とハ、五かいたもち給ひたらば、そのちからもやと、いたゞきしるしばかりはさミて、五かいばかりをうけさせ奉り給ふ也。「いむことのすぐれたる」とハ、五戒龍王經に、一日一夜間、持一帰五戒一人、生三三十三天中。

一、「御かたハらに」とハ、むらさきのうへのかたハらに、源氏そひ給て、ほとけをもろ心にねんじ給へる也。かしこくおハする人も、御まどふ事にあたりてハ、え心しづめ給ハぬと也。いかなるわざをして、むらさきの上をすくひ、とゞめ奉らんとおぼしなげくに、御かほもすこし源氏やせ給へる也。

一、五月などハ、ましはれ〳〵しからぬけしきに、むらさきの上の心ちさハやぎ〈52オ〉給ハねど、ありしよりハすこしよろしくみえ給ふ也。「物のけのつミすくふ」とハ、御息所の御ために、日〻にほけきやう一部づゝくやうせさせ給へる也。

一、「あらハれそめてハ」とは、ミやす所のれいこん、おり〳〵あらハれ給へる也。さらに此御息所のれいこんはなれはて給ハぬ也。

一、あつきころハ、いよ〳〵よハり給へる也。源氏いはんかたなくおぼす也。

一、「なきやうなる」とハ、むらさきのうへ、源氏御なげきを、心ぐる

しく見奉り給へる也。なくならんも、わが身にハくちをしき事のこるまじけれど、源氏のおぼしまどふを、むなしくみなされ奉らんが、思ひくまなかるべければ、おぼしおこして、ゆなどすこしまいるけにや、六月になりて、時〻御ぐしもたげ給ける。

一、「六条院にハ」とは、女三のミやにハ、あからさまにもえわたり給ハず。「姫ミや、あやしかりしことののち」とハ、かしハ木あやまちありしのち〈52ウ〉物をおぼしなげきしより、やがてれいのやうにもおハせず、さりながらをどろ〳〵しくハあらず、「たちぬる月より」とハ、五月より物きこしめさで、あをミそこなハれ給ふ。「かの人ハ、わりなく」とハ、かしハ木は、おもひあまり給ふとき〳〵ハ、ゆめのやうにみたてまつれど、女三のミやハつきせずわりなきうきちぎりとおぼしければ、心とけ給ハず。

一、「院をいミじく」とハ、源氏をおぢ給へる御心に、かしハ木のありさまもげんじと、ひとしくだにやハある。よしめきたれば、大かたの人こそ、なべての人にまさりたるとハおもへども、女三のミやの御めにハめざましくのミぞ見給へるに、かくなやミ給へるハ、うきすくせにぞありける。

一、御めのとたち見奉りとがめて、源氏のわたり給ふ事もなきを、女三のミやの御なやミハしらせ給ふらんに、源氏をうらみ奉る也。なやミ給ふときこしめして、源氏わたり給ふ也。〈53オ〉

一、「をんなぎミハ」とは、紫上ハ、あつくむつかしとて、御ぐしすまして、さハやかにもてなし給へる也。「うちふしながら」とハ、かみをうちふしながらかはかさんとし給へる也。「うちやり」とハ、をしのけて、かミをかハかせんとし給ふ也。「まがふすぢなく」とは、みだれたるすぢなき也。「けうらに」とハ、きよら、おなじこと也。「あをミをとろへ」とハ、あをミやせ給へる也。「色ハさをに」とは、あまりしろき物ハ、あをくミゆるを、さをにといへる也。

一、「すきたるやうに」とハ、すいしやうなどのすきたるやうに、はだつきのすきてみえ給ふ也。「もぬけたる」とハ、せミのからのやうに、いまだむらさきの御ありさまよハげなると也。

一、「あれたりし院のうち」とハ、二条院ひさしくすミ給ハざりしに、たとしへなくせばげなるまで、人つどひ給たると也。「たとしへ」ハ、たとへなく也。

一、「きのふけふ物おぼえ給ふ」とハ、紫上心ち昨日けふさハやき給ふとて、せん〈53ウ〉ざいやり水つくろハせ給へる。うちつけに心ちよげなるを紫上みいだして、あハれにいままでへにけるをおぼす也。

一、「かれ見給へ」とハ、いけのはちす見給へと、源氏むらさきのうへにの給ふ也。むらさきの上おきあがりて見いだし給へるを、めづらしと源氏ミ給ふ也。

一、「わが身さへ」とハ、源氏もいのちかぎりとおぼゆるおり〳〵ありしとの給ふ也。

一、「ミづからも」とハ、紫の上もあハれとて、よミ給へる也。

一、「きえとまるほどやハふべき玉さかにはちすの露のかゝるバかりを」、いのちきえとまるとても、ほどはあらじ。はちすの露のかゝるあひだバかりならん、とむらさきのうへよミ給へる也。げんじ御返し、

一、「ちぎりをかんこのよならでもはちすばに玉ゐる露の心へだつな」、のちのよも、おなじはちすのうへすむべし、露ほども心へだて給ふなと也。

一、「いで給ふ」とハ、女三の宮の御かたへおハしますハ物うけれど、内にも朱雀〈54オ〉院にもきこしめさん所いかゞあらん、なやミ給ふときゝてもほどへぬるをとて、いで給ふ。「めにちかきに」とハ、紫上のなやミに心をのミまどハして女三のミや見奉る事もおさ〳〵なかりしと也。「おさ〳〵」ハ、長也。

一、「かゝるくもまに」とハ、むらさきのうへのなやミ給ふほどハ、源氏心くれまどひ給て、すこしよろしくおハすれば、くもはれたる心と也。

一、「ミやハ、心のおにゝ」とハ、女三のミやハ、かしハ木のあやまちを心にをそろしくおぼす也。心にをそろしきことをこめたるが、心の鬼也。源氏の物の給ふいらへをも女三のミやし給ハぬ也。

一、「日ごろのつもりを」とハ、源氏ハ、此ごろのとだえをうらみ給ふと、おぼす也。

一、「おとなびたる」とハ、めのとめしいでゝ、御なやミのさまとひ給ふ也。

一、「れいならぬ御心ち」とハ、くわいにん心ちと、めのと申也。

一、「あやしくほどへて」とハ、わたり給ふ事ほどへたるに、くわいにんハ心もとな〈54ウ〉きとばかり源氏の給ふ也。「としごろへたる」とハ、花ちる里などにだに御子のなければ、ふぢやうなる事と、心のうちに源氏おぼす也。ことにとかくのあひしらひもし給ハで、なやミ給ふさまらうたしとおぼす也。

一、「いかに〳〵」とハ、むらさきの上の心ちのミいかにと御ふミをかきかよハし給ふ也。

一、いつのまにつもる御ことのはにかと、めのとやすからぬよをもみるかなと、めのとハ女三の御あやまちをしらでいふ也。

一、侍従ぞ源氏のおハしましたるにつけても、むねさハぎけると也。

一、「かの人ハ、かく」とハ、かしハ木ハ、源氏のわたり給へるをきゝて、心あやまりして、御ふミをかきつくして、たてまつりける。「たいにあからさまに」とハ、むらさきのうへのすミ給したいへ源氏あからさまにおハしましたるひまに、かしハ木の御ふミ女三のミやに小侍従ミせ奉る也。「あからさま」ハ、かりそめ也。

一、女三のミや、むつかしき物みするこそ心うけれと、ふし給へれば、たゞこのはし〈55オ〉がきのいとをしげなるとて、小侍従ひろげてミせ奉る也。

一、「人のまいるに、くるしくて」とハ、小侍従ハみ木丁ひきよせてさりたる也。

一、「むねつぶるゝ」とハ、女三のミやむねつぶれ給ふに、源氏の入給へば、よくもかくし給ハで、御しとねのしたに、さしはさミ給たる也。夕さりつかた、二条院にわたり給ハんとて、源氏御いとまごひにおハしましたる也。「こゝにハ」とハ、女三のミやハ、けしうハあらずみえ給ふを、まだいとむらさきのうへ心ちたゞよハしくおハするを、見すてたるやうなるもいとをしくて、ひが〳〵しきこといふ人ありとも、きゝいれ給ふな、とかたらひ給ふ也。れいハ、なまいハけなきたハぶれごとなども、きこえ給ふを、しめりて、さやかにめをもミあハせ給ハで、女三のミやおハするを、源氏たゞよをうらめしとやおぼさるゝと心え給へば、ひるのおましにうちふして、かたらひなぐさめ給ふほどにくれにけり。日ぐらしの花やかになくにをど〈55ウ〉ろき給て、源氏、さらば、みちたど〳〵しからぬほどにとの給へば、女三のミや、月まちてもとの給ふハ、引哥、夕やミハミちたど〳〵し月まちてかへれわがせこそのまにもミん、にくからず女三のミやの給たると、源氏おぼす。「そのまにもとや」とハ、月まつほどもとまれかしとやおぼすと、たちとまり給ふ。

一、「夕露に袖ぬらせとや日ぐらしのなくをきく〳〵おきてゆくらん」、女三のミや、袖ぬらせとて日ぐらしのこゑきゝつゝかへり給ふらんと、よミ給へる也。「かたなりなる心に」とは、此哥よくとゝのをらぬてにはと也。日ぐらしのなくにおきてゆくハ、あしたのうためきたるがなりあハず、かたなりなると也。

一、「まつ里もいかゞきくらんかたゞ〳〵に心さハがす日ぐらしのこゑ」、むらさきのうへのまち給ふ心に、日ぐらしをいかゞきゝ給ふら

ん、女三のミやハゆくをしたひ給ふかた〴〵に心さハがす日ぐらしとよミ給へる也。〈56オ〉

一、なさけなからんもとて、とまり給ぬ。又、むらさきのうへをしづ心なくおもひやり給ふ也。あさすゞみのほどに二条院へハかへらんとおぼす也。

一、「よべのかハほりをおとして」とハ、あふぎをたづね給ふ也。「これハ風ぬるく」とは、ひあふぎかぜぬるき也。かミはりたるあふぎを、かハほりといふ也。かうぶりのはねをまねたる也。きのふうたゝねし給しおましのあたりを、たちとまりてみ給ふに、御しとねの「まよひたる」と、（マヽ）みだれたる所より、ふミのをしまきたるはしミゆる也。「あさみどり」ハ、うすもえぎ也。なに心なく文ひきいでゝ御らんずるに、おとこのてなり。「まぎるべきかたなく、その人のてなり」とは、かしハ木のてとみ給たる也。

一、「ミ給ふべき文にこそ」とハ、むらさきの御文にこそあらめとおもふ也。

一、小侍従ぞ、きのふの文の色とみるに、むねつぶ〴〵となる心ちする也。源氏の御かゆなどまいるにも、小侍従みもやらず、さりとも御〈56ウ〉ふミはかくさせ給ひつらんとおもふ。「ミやハなに心もなく」とハ、女三のミやハまだおほとのごもれり。

一、あないはけな、かゝる文をちらし給て、われならぬ人のミつけたらば、とおぼすに、心おとりして、されば、心にくき所なきを、うしろめたしとはみるかし、とおぼす。「いで給ぬれば」とは、源氏かへり給へば、「人〻あかれ」とは、たちわかれて、女のミやのおまへ（マヽ）人ずくなゝるに、侍従よりて、きのふ御文ハいかゞせさせ給てし、と女三のミやにとひ奉る。（マヽ）

一、あさましと女三のミやおぼして、なみだのたゞいできにいでくれバ、いとおしき物から、いふかひなの御さまやと見奉る。人〻のまいりしに、ことありがほにちかくさぶらハじと、さばかりのいミをだに心のおにゝさりきこえとは人よりうたがハれしさばかりのつゝしミをだにしつるに、源氏のいらせ給しほどハすこしほどへつる物をと申す也。〈57オ〉

一、「いさとよ。見しほどに」とは、文ミる折ふし入給つれば、ふともをきあへでしとねのしたにさしはさミしをわすれにけりとの給ふ。「より」とハ、侍従よりてみるに、いづくにかあらん。あないミじ。「かのきミも」とは、かしハ木も、いたくおぢはゞかりて、けしきにてももりきかせ給ふ事あらばと、かしこまり給し物を、ほどだにへず、かゝる事のいできたるよと、すべていはけなくおハしますゆへといへる也。としごろさばかりわすれがたく、かしハ木うらみ給つれど、かくハなかりしを、みすのつまより見たてまつりこそ、かくまで思なげき給けれと、小侍従いへる也。はゞかりなくきこゆるも、女三の宮のわかく心やすくおハするゆへに、小侍従かしハ木にも中だちしけるなるべし。女三の宮ハ、いらへもし給ハで、たゞなきになき給ふ也。

一、なやましくし給ふを、源氏ハ見をき奉り給て、をこたり給しむらさきの〈57ウ〉うへの御あつかひに、御心いれ給ふと、めのといふ也。「をこたり」ハ、やまひ快氣をいふ也。

一、「おとゞハ」とは、源氏ハ、此文をあやしとおぼして、うちかへしつゝ給て、「中納言のてにゝたる」とハ、かしハ木のてにゝたる女房たちのかきたるか、とおぼせど、ことばづかひまがふべきかたなくかき給たる也。玉さかにあひ奉りたる心をミ所あるさまあハれなれど、かやうにさやかにハかくべきか、あたら人の、文をこそ思やりなくかきたれと、かしハ木の心さへ見おとし給へる也。（マヽ）

一、「むかしかやうに」とハ、うつせミなどにかきかハし給たる文もおちゝるやうもやとまぎらハしてこそかきつれ、と人のふかきよういい

ハかたきわざなりとおぼす也。「ようい」、用心（ようじん）也。

一、「さても、此人をいかゞもてなし」とハ、女三の宮いかゞもてかしづくべきぞ、くわいにんのさまも、かしハ木にあひ給てのゆへならんとおぼす也。うき事をしる〳〵、ありしながら見奉らんハ、わが心ながらも、え思ひなをすまじく〈58オ〉おぼす也。なをさりのすさびと、はじめより心とゞめぬ人だに、ことざまに心わくらんとおもふハ、心づきなきに、まして、女三の宮ハとりわきてかしづき奉るに、「おほけなき人の心にも」とハ、かしハ木身におほせぬふるまひとおぼす也。

一、「みかどの御めをもあやまつ」と、（ママ）二条のきさきを業平のあやまち給たるためし也。「それハいふかたことなり」とハ、宮づかへ人ハ、われも人もきミにおなじやうにつかうまつるほどに、をのづから、なさけをかハしそめ、物のまぎれおほかれば、女御かういといへども、かたほなる心ある人もあり、心おもからぬうちまじれば、おもハずなる事あれど、おぼろけのさやかなる（ママ）あやまちみえぬほどハ、さてまじらひ給ふやうもあらんに、ふとしもあらハならぬまぎれありぬべし、と源氏おぼす也。

一、「かくばかり」とハ、女三の宮ハ、うち〳〵に心ざしふかき紫（むらさき）上の事よりも、いつくしくかたじけなき物に思ひはぐくむ人をゝきて、かゝるふるまひ〈58ウ〉ハたぐひあらじ、と女三の宮の心をつまはじきせられ給へる也。

一、みかどゝきこゆれど、たゞすなをに、おほやけざまの心ばへバかりにて、ミやづかへのほどもすさまじきに、わたくしの心ざしふかきねぎごとになびくハ、おなじけしからぬすぢなれど、よるかたありと也。「ねぎごと」ゝは、くねり事也。神（かミ）にねぎの物申すやうなる心也。「よるかたあり」とハ、なびきよりあひたるも、にくからぬもあるの心也。

一、「さばかりの人に」とハ、かしハ木に、心かハしおもひかへ給ふばかりにハ、わが心ながら女三の宮なをざりにハあつかひ奉らぬ物也、と源氏おぼす也。又けしきにいだすべきわざならぬとおぼしみだるゝ也。

一、「古（こ）院のうへも」とハ、きりつぼのみかども、藤つぼに密契（みつけい）の事しろしめしながらや、しらずがほをつくらせ給けんと、そのよのこと、いを（ママ）そろしくおぼしいで給へる也。「ちかきためし」とハ、藤つぼおかし給ひしためしを〈59オ〉おぼすにぞ、恋の山ぢハえもどくまじき御心まじりける也。引哥、いかばかり恋の山ぢのしげゝればいりと入ぬる人まどふらん、わがあやまちをおぼすにぞ、かしハ木ハもどくまじくおぼすと也。

一、「つれなしつくり給へど」ゝハ、源氏おぼしみだるゝ心をつれなくつゝみ給へとけしきしるく紫（むらさき）上み給て、わがきえのこりたるいとをしミとて、わたり給て、女三の宮のなやミ心ぐるしくおぼしみだるゝかとおぼして、女三の宮なやましげにおハすらんに、とく源氏わたり給にしこそ心くるしけれ、とむらさきのうへの給へるに、さかし、れいならずみえ給しかど、ことなる御心ちにもおハせねば、をのづから心のどかに思ひて、内（うち）よりハたび〳〵御つかひあり。けふも御文ありつ。朱雀院のやんごとなくきこえつけ給へりければ、うへもかくおぼしたるべし。「こなたかなたおぼさん事」とハ、みかどゝ朱雀院（しゅじゃくいん）とのおぼさんことをしきと源氏の給ふ也。〈59ウ〉

一、うちのきこしめさんよりハ、女三の宮のうらめしと思ひきこえ給はんこそ心ぐるしからめ、とむらさきのうへの給ふ。われハおぼしとがめ給ハずとも、めのなどのよからぬさまにいひなさんこそくるしうと紫（むらさき）上の給へる也。

一、「げに、あながちにおもふ人のため」とハ、真実（しんじつ）におもふ人（ママ）ためにハ、「わづらハしきよすがなけれど」ゝハ、わづらハしきゆへなきに

も、おほよそ人のおもハん所までたどらるれど、女三の宮の御事ハたゞ国王の御心やをき給はんとばかりハ、おもふハあさき心ちしける、源氏の給ふ也。こくわうと、朱雀院今上のおぼしめさんの心也。

一、「わたり給ハん」とハ、六条院にわたらんことハ、むらさきのうへもろともにこそよく侍らめ、と源氏の給ふ也。「こゝにハしバし心やすくて」とハ、むらさきのうへハしバらく二条院にやすミ給はんとの給ふ也。

一、「人の御心も」とハ、源氏ハまづわたり給て、女三の宮の心なぐさめ給へとの給ふ也。〈60オ〉

一、「ひめ宮ハ」とは、女三の宮ハ、かく源氏のわたり給ハぬも、源氏のつらさにのミおぼしつるを、いまハわが御をこたりうちまぜてかくなりぬるとおぼすに、朱雀院もきこしめしつけてハいかにおぼしめさんと、よの中つゝましくおぼすと也。「かの人も」とハ、柏木も、いミじげにいひわたるに、小侍従かの御ふミ源氏の見つけ給へりしとつげゝれば、いつのほどにとさる事いできけんと、そらにめつきたるやうにをそろしきと也。「そらにめつきたる」とハ、てんだうをおぢ給たる也。

一、「あさ夕すゞみも」、引哥、なつの日もあさ夕すゞみある物をなどわがこひのひまなかるらん。「身もしむる」ハ、身もひゆるまで、をそろしきと也。

一、「あだごとにもまめごとにも」とハ、たハぶれあそびにも、又真実なることにも、めしまつハし源氏したしくおぼしめしし物をと、柏木おぼしなげく也。かく源氏に心をかれ奉りてハ、いかでかめをも見あハせ奉らん、さりとて、かき〈60ウ〉たえまいらざらんも人めあやしく、源氏の御心にもおぼしあハせん事のかなしさ、などやすからずおもふに、心ちもなやましくて、うちはへてまいり給ハず。「さればよと」ゝハ、かやうにくるしからん事と、わが心もつらくぞおぼしわびたる。いでや、しづかに心にくきけハひみえ給ハぬわたりぞや、と女三の宮になんをつけて、かのみすのはざまも、さるべき事かハ、と夕ぎりのおもふ給へりしけしきも、柏木思ひいで給ふ也。しゐておもひさまさんと女三の宮に、なんをつけたてまつらまほしくてよきやうとても、あまりあてなる人ハ、よのありさまもしらず、さぶらう人にも心をき給ハぬゆへに、かくいとをしくわが御身のためも、人のためにもうき事いできにけりと、かのくわいにんの心ぐるしさも、えおもひはなたれずおぼしわび給たる也。

一、「宮ハ」とは、女三の宮は、らうたげに、なやミわたり給へるを、源氏ハかくおもひ〈61オ〉はなち給ふにつけて、うきにまぎれぬ恋しさのくるしきまでおぼさるれば、源氏わたりて見給ふに、むねいたくおぼさるれば、御いのりなど、せさせ給ふ。大かたの事ハありしにかハらず、やんごとなくもてかしづき給ふさまをまし給へる也。うちとけかたらひ給ふさまハ、こよく御心へだゝりゆく、かたハらいたく源氏おぼせば、人めばかりをめやすくもてなして、おぼしみだるゝ御心のうちしもぞくるしかりける。「さることみき」とハ、文みたるとハあらハし給ハぬに、「ミづからわりなく」とハ、女三の宮わりなくおぼしたるさまも心おさなし。いとかくおさなくおハしますゆへ、かしハ木もいひよりたるぞかしとおぼす。よきやうといひながら、あまり心もとなくをくれたるも、たのもしげなきわざなり、とよの中なべてうしろめたくおぼす也。

一、女御のあまりやハらかにをびれ給へるこそ、かやうに心かけん人ハ、まして心みだれなんかし、女ハはるけ所なうなよびたるを、人もあなづる也と、〈61ウ〉「さるまじきに」とハ、さもあるまじきおとこも、女のやハらかなれば、ふとめとまりて、心づよからぬ時、あやちハしいづるなり、と源氏おぼす也。

一、「右のおとゞの北方」とは、玉かづら、とりたてたるうしろミもな

く、おさなくより物はかなくておひいで給しかども、らうありて、われもにくき心そへしかども、なだらかにもてなしすぐし、此ひげくろのむしんの女房に心あハせて入きたりけんも、もてはなれたるさまを人にもみえしられて、ゆるされたるありさまにて、わが心とひげくろにもあひてつミあるさまにもなさぬなど、おもへば、かどある事也けり。ちぎりふかき中なれば、かくてもたもつ事ハ、あらまし物から、心もてあだ〳〵しくありし事とおもひいでば、かろ〴〵しく人もおもふべきを、いたく心にくゝもてなしたるわざぞ、とおぼしいづる也。

一、「二条の内侍のかんのきミ」とハ、おぼろ月よを、たえずおぼしいで給へ〈62オ〉ど、かううしろめたきすぢの事、うき物におぼししりて、おぼろ月よの心よハさも、すこしかろく思なされ給ひけり。つゐに御ほいの事し給てけり」とハ、あまになり給たる也。源氏きゝ給て、あハれにくちおしくて、まづとぶらひ給へる也。「いまなんとだに」とハ、いまこそあまになるともの給でと、あさからず聞え給ふ。

一、「あまのよをよそにきかめやすまのうらにもしほたれしもたれならなくに」、源氏すまにさすらへしも、たれゆへならん。おぼろ月よゆへにてこそあれと也。さま〴〵なるよのさだめなさを、思ひつめて、いままでおぼろ月よにをくれ奉るくちをしさを、おぼしすてつとも、さりがたきゑかうのうちにハ、まづこそいれ給ハめ、と源氏の給ふ也。引、願以此功徳、普及於一切、我等与衆生、皆供成佛道。この心ならば、われもゑかうにハ、おぼろ月よもらし給ハじ、と源氏の給也。〈62ウ〉

一、「とくおぼしたちにし」とハ、あまにならんとおぼろ月よとくおぼしたち給ひしかど、源氏のさまたげにて、いままで延引し給しとハ、人にハおぼろ月しらせ給ハぬ事なれば、むかしよりつらかりし御ちぎりの、さすがにあさからぬをおぼしいで給へる也。御かへし、いまハかくしもかよふまじき御文のとぢめとて、心とゞめてかき給ふ。すみつきおかしき也。

一、つねなきよとハ心ひとつにのミしり侍にしを、をくれぬるとの給ハせたるになん、げに、源氏、あまにおぼろ月よなり給たるに、をくるゝとの給たるハ、いつハりにてこそあれとうらみ給ふ也。

一、「あまぶねにいかゞ思ひをくれけんあかしのうらにいざりせしきみ」、源氏させんもわれゆへとおぼさバ、あまにもをくれ給ふまじきを、さまでハおぼさぬにてこそあれ、とよミ給へる也。あかしのうへゆへこそはあかしにいざりし給へるの心也〈63オ〉

一、「ゑかうにハ、あまねき」とハ、普及二於一切一といへども、あまねきかたにてもいかゞハあらん、もらし奉らんの心也。あをにびのかミにて、しきミにさし給たる也。れいのことなれど、ふでづかひすぐしてかき給へる也。

一、二条院におハしますほどなれば、むらさきのうへに、いまハ文のかよひたえぬることゝて、みせたてまつり給へる也。「いたくはづかしめられたる」とハ、入道をゝくれたりとて、おぼろ月よにはぢしめられたると源氏の給ふ也。いままで入道せぬ事、心づきなくおもふとげんじの給ふ也。さま〴〵のよのありさま心ぼそきとの給ふ也。

一、はかなく物をいひかハし、時〻にあハれをもしり、ゆへをもすぐさず、よそのむつびをもかハすべき人、斎院と此おぼろ月よばかりこそのこり給たるに、かくみなそむきはてゝ、斎院はた、いミじくつとめて、をこなひにしミ給へる、と源氏の給ふ也。「ゆへ」とハ、種姓也。〈63ウ〉

一、「こゝら人のありさま」とハ、おほくの人をきゝみるに、ふかくおもふさまに、なつかしき事の、「かの人に」とハ、斎院に、なずらひなるべきだになきなきと源氏の給ふ也。「なずらひ」ハ、たぐらぶる

だになきの心也。

一、「をんなごをおほしたてん事、いとかたかるべき」とハ、女三の宮庭訓也。てゐくんとハ、をしへのはじめをいふ也。女三のミやのやうにてハあしからんと也。「おやの心にまかせず」とハ、すくせハ、おやにもさだめられがたきなれども、よくちからいれて、をんなごハおぼすべき物との給ふ也。

一、「よくこそあまた」とハ、むすめあまたもたぬがよき、と源氏の給ふ也。「かた〴〵に」とハ、花ちる里・すゑつむ花などに、むすめなきが心をみだるまじきちぎりうれしきとの給ふ也。

一、「さま〴〵にみましかバ」とハ、わかき時ハ、むすめはら〳〵にまうけましかバ、となげかしきおり〳〵ありしと源氏の給ふ也。〈64オ〉

一、「わか宮を」とハ、女一の宮の御こと、よく心しておぼし奉り給へと紫上にの給ふ也。女御ハ物の心ふかくしり給ふほどならで、いとまなきまじらひに、心もとなきかたにぞ物し給ハん。内親王ハ、あくかぎり人にてんつかれ給ふまじくて、よをのどかにすぐし給ハんに、うしろめたかるまじき心ばせ、つけまほしきわざなり。とざまかうざまのうしろミまうくるたゞ人ハ、それにたすけられてもずきぬるを、むらさきのうへに源氏の給ふ也。

一、はかゞ〳〵しきさまの御うしろミならずとも、よにながらへんかぎりハ、見奉らぬやうあらじとおもふを、と物心ぼそげにて、かく心にまかせて、をこなひし給ふ。斎院・おぼろ月よをうらやましく紫上おぼす也。

一、「かんのきミに」とは、おぼろ月よに、あまになり給たるさうぞくなど、まだたちなれぬほどハとぶらふべきを、「けさなどハいかに」〈64ウ〉とハ、むかしのあまのけさいかやうにぬふ物ぞとげんじの給ふ也。「それせさせ給へ」とは、むらさきのうへせさせ給へ、と源氏の給ふ也。「一くだりはひんがしのきミ」とハ、花ちる里にせさせんとの給て、「うるハしきほうぶくめきてハ」とハ、まことの法服めきてハ、うたてあらん、「その心ばへみせて」とは、ほうぶくをまねてし給へとの給ふ也。

(一)、「あをにびの一くだり」とは、花だにくろミいりたる也。むらさきのうへそめさせ給へる也。

一、「つくも所」とは、しろがねざいくをめして、あまの佛具せさせ給ふ也。御しとね、屏風木丁など、みなとゝのへ給へる也。

一、山のみかどの御賀ものびて、「八月ハ夕ぎりのき月」とは、あふひのうへのかくれ給へる月なれ。大将、あそびのかたいミ給ふ月也。「九月ハ院の大きさき」とハ、あしきさきのかくれ給へる月なれバ、〈65オ〉朱雀院御あそびいミ給ふ月也。十月にとおぼしまうけゝれバ、女三の宮いたくなやミ給へば、又のびぬ。「衛門督の御あづかり」とは、女二の宮、御賀のた、朱雀院へまいり給ふ也。「おほきおとゞ」とは、内府、ゐたちて、いかめしく、きよらにぎしきとゝのへ給ふ也。「かんのきミも」とハ、かしハ木も、そのつゐでにいで給ける也。れいならず、やまひづきてのミすぐし給ふ也。

一、「宮も、うちはへ」とハ、女三の宮も、物をつゝましく、源氏のなげき給へるを、いとをしとのミおぼしなげくけにやあらん、月おほくかさなるまゝに、いとくるしげにおハします也。

(一)、「院ハ心うし」とハ、源氏ハ心うしとハ思ひ給へどいとらうたげにあへかなるさまに、なやミ給ふを、いかにおハせんとなげかしくて、御いのりなど、し給ふ也。「ことしハ」とハ、むらさきのうへのなやミにまぎれて、〈65ウ〉女三の宮の御いのりをこたり給し事、源氏ハなげき給ふ也。

一、「ミ山にもきこしめして」とハ、朱雀院も、女三の宮の御なやミきこしめして、恋しくおぼさるゝ也。「月ごろほか〴〵にて」とハ、源氏のよそ〳〵にて、わたり給ふ事長〳〵なきやうにきこしめして、

いかなるにかと御むねつぶれて、いまさらによの中もうらめしくおぼす也。「たいのかたの」とハ、紫上のなやミ給けるころハ、そのあつかひにて女三の宮にハよがれがちなりしに、そのゝちも源氏の心なをりがたく物し給ふらんハ、そのころほひびんなきことやいできたりけん、とおぼさるゝ也。

一、身づからしり給ふ事ならねど、よからぬ御うしろミどもの心にて、いかなることやありけん、「うちわたりの、ミやび」とハ、きんちうなどの、なさけをかハす中らひにも、けしからぬ事いひいづるたぐひもきこゆれど、それハまぎるゝ事もありとさへ朱雀院おぼさるゝ也。〈66オ〉

一、おぼしすてしよなれど、なを子のミちハはなれがたくて、女三のミやにも朱雀院御文こまやかにてありける也。

一、おとゞおハしますほどにて、見給ふに、その事となくて、しば〳〵もきこえぬ事と、朱雀院かゝせ給て、なやミ給ふさま、くハしくきゝしより、ねんずのつゐでにもうちまぜ思やらるゝハ、いかゞおもハずなる事ありとも、しのびすぐし給へ。おぼろけにてもみしりがほにうらめしきけしきあらハし給ふななど、かき給へる也。うらみがほなる事、ほのめかす、「しななき」とハ、いやしき事と、をしへ聞え給へる也。

一、「心ぐるしく、うち〳〵のあさましき」とハ、女三の宮のあやまちをきこしめすべきにハあらで、わがをこたりにほいなくきゝおぼすらんを、とばかり源氏おぼしつゞけて、此御返しいかゞきこえ給ふ。心ぐるしき御せうそこに、まろこそくるしけれ。おもハずなる事ありとも、〈66ウ〉をろかに人のみとがむばかりハあらじとこそ思ひ侍れ。たが聞えたるにかあらんと源氏の給へば、はぢらひてそむき給へる女三の宮の御すがた、らうたげなる也。いとおさなき御心ばへを、朱雀院ミをき給て、うしろめたがり給なりけりと、思ひあハせたてまつれバ、いまよりのちもよろづになん。かうまでもきこえじとおもへど、朱雀院の御心にそむくときこしめすらん事のやすからずいぶせきを、こゝにだにきこえしらせでやハとてなん。いたりすくなき、たゞ人のきこえなす事にのミよるべかめる御心にハ、たゞわがをろかにあさきとのミおぼし、「又いまハこよなきさだすぎにたる」とハ、わがありさまのとしおひすぎたるとやあなづり給ふらん、としおひたるとめなれてのミ見なし給ふらんも、かたぐくちをしもうれたくもおぼゆる、と源氏の給ふ也。「うれたく」とハ、うれハしき也。愁の字也。〈67オ〉

(一)、「院のおハしまさんほど」ゝハ、朱雀院のおハしまさんほどハ、かのおぼしをきてたるまゝに、さだすぎ人をも、朱雀院になずらへ給て、いたくなかろめ給そ、と源氏の給ふ也。「さだ過人」とハ、わが事をの給ふ也。五十過たるを、さだ過るといふ也。「なずらへて」、たぐらへて也。

一、「いにしへよりほいふかきミち」とハ、入道の本意ふかきの心也。「たどりうすかるべき女がたにだに」とハ、斎院おぼろ月よなどにだに、をくれつゝ、ぬるきやうなるも、朱雀院の女三の宮をいまハのきにとゆづりをき給たるゆへに、かく侍ると源氏の給ふ也。「たどりうすかるべき」とハ、思案うすかるべき也。

一、「ひきつゞきあらそひ」とハ、朱雀院の入道し給へるを、あらそふやうに女三の宮ミすて奉らん事の、あへなくおぼされんとて、入道延引したると源氏の給ふ也。「あへなく」ハ、ほどなきの心也。〈67ウ〉

一、「心ぐるしと思ひし人〻も」とハ、源氏おもひ人たちにもかけとゞめらるゝほだしになるもなし、女御も、み子たちかずそひ給へば、わが身のよだにのどけくハ、と見をき侍り。そのほかの人〻ハ、あらんにしたがひて、われもろともに身をやつさんにも、おしかるまじくなりたるよハひどもなれば、すゞしく思ひ侍る、と源氏の給ふ

也。

一、院の御よのこりひさしくもおハせじを、「あつしく」とハ、朱雀院御やまひおもくなりまさり給へば、いまさらにおもハなる御名たて給て、かの御心みだり給ふな。此よハいとやすし。のちのよの御みちのさまたげならん、つミをそろしからんなど、まほにその事とはあらハし給ハねど、つく〳〵との給ひつゞけ給ふに、女三のミやなミだのミおちつゝ、われにもあらでおハします也。

一、われもうちなき給て、人のうへにても、もどかしくきゝ思ひしふる人の〈68オ〉さかしらよ、とおもひしことの身のうへなりたると源氏おぼしつゝ、いかに女三の宮うたてのおきなやと、むつかしくうるさしとおぼすらんと、はぢ給つゝ、御すゞりとりまかひ、御かへしかゝせ奉り給へど、御てもわなゝきて、女三のミやかき給ハず。かのかしハ木のこまかなりし御返しは、つゝまずかよハし給ふらんとおぼしやるに、にくけれど、ことばなどををしへて、かゝせたてまつり給ふ也。

一、「まいり給はん事」とハ、朱雀院の御賀にまいり給ハん事、此月ハかくて過ぬ。「二のミやの御いきほひことにて」とハ、かしハ木のきたのかたまいり給へるに、「ふるめかしき御身のさま」とハ、あねの女二の宮ハわかやかにて、朱雀院に見え奉り給ハんハ、女三のミやハくわいにんにて、ふるめかしくて見え奉り給はんも、はゞかる心ちするとの給ふ也。

一、「霜月ハ、ミづからのき月」とハ、古院のかくれさせ給へる月也。〈68ウ〉

一、「としのおハりはた、物さハがし」とは、しハすハ、物さハがしかるべけれと、「又いとゞ此御すがたも」とハ、女三のミやの御なやミも見ぐるしくまちみ給はんを、とおもへども、さりとてさのミのぶべきことならず、むつかしくおぼしみだれず、あきらかに心もてなして、おもやせ給へる、つくろひ給へ、と女三のミやに源氏の給ふ也。

一、衛門督をば、なにざまの事にも、ゆへある事にハ、めしまつハし給つゝ、の給ハせあハせしに、たえて御せうそこもなし。人あやしむぺきとおぼせど、ミんにつけても、いとゞほれ〳〵しきかたはづかしく、見んに又わが心もたゞならやとおぼしかへされつゝ、月ごろかしハ木まいり給ハぬを、源氏とがめもし給ハぬ也。大かたの人ハ、れいならずかしハ木なやミわたり、又六条の院にも御あそびなどもなきとしなれば、とのミおもひわたるを、大将ぞ、あるやうある事なるべし、すき物ハさだめて、わがけしきとりし事〈69オ〉にえしのばぬにや、と夕ぎり思ひよれど、かくさだかにのこりなきさまならんとハ、思ひより給ハぬ也。十二月になりぬ。十よ日とさだめて、まひどもならしつゝ、六条院のうちのゝしる。「二条院のうへも」とハ、紫上ハ、まだわたり給ハぬを、此しがくによりてぞ、わたり給へる。女御のきミも里におハします。此たびのみ子ハ、おとこになん、おハしける。あけくれもてあそび給ふに、紫上すぐるよハひのしるし、うれしくおぼされける。試樂には、玉かづらもわたり給へり。「大将のきミ」とハ、夕ぎり、うしとらのまちにて、まづうち〳〵にてあそびならし給へば、花ちる里は、しがくハみ給ハぬ也、

一、ゑもんのかミを、かゝることのおりもまじらハせざらんも、いとはへなからん、又人あやしとかたぶきぬべき事なれば、まいり給ふべきよしあれど、おもくわづらふよし申てまいらず。さるハ、くるしげなるやまひにもあらざなるを、おもふ心あるにやと、源氏おぼして、とりわきて御せうそこつかハす。〈69ウ〉

一、「ちゝおとゞも」とハ、内府も、などかかへさひ申されける。ひが〳〵しきやうに、「院にも」とハ、朱雀院にも、きこしめさんを、おどろ〳〵しきやまひにもあらぬを、たすけてまいり給へ、とそゝの

かし給ふ。「かへさひ」とハ、再返にの給ふにと也。

一、「くるしとおもふ〳〵」とハ、かしハ木くるしさたすけてまいり給へる也。

一、れいけぢかきみすの源氏めしいれて、もやのすだれのうちおハしまして、かしハ木げにいとやせ〳〵にあをミて、花やぎかたハおとうとのきんだちにハもてけたれて、いういありがほにしづめたるを、いとゞしづめてさぶらふ。などかハみ子たちの御かたハらにさしならべたらんに、「とがあるまじき」とは、内親王の御おとこといふとも、かしハ木不足あるまじけれども、たゞ女三の宮に密契せしがきずなると也。つミゆるしがたき、と源氏御めとまると也。

一、「月ごろハ、色〻のびやうざをあつかひ」とハ、紫上女三宮のなやミをあつかひてなどゝ源氏の給ひて、朱雀院の御賀のため、女三の宮〈70オ〉法事つかうまつり給ふべくありしを、つぎ〳〵とゞこほりつゝ、としもせめくれば、思ひのごともしあへで、いもゐの御はちまいるべきを、御賀などいへば、こと〳〵しきを、家におひいづるわらハべども、御らんぜさせんと、まひならハしはじめし、その事をはたさんとて、ひやうしとゝのへん事、又たれかハと思ひめぐらしかねて、月ごろとぶらひ給ハぬうらみもすてゝけるとの給ふけしき、うらなき物から、はづかしきに、かしハ木かほの色たがふらんとおぼえて、御いらへもとミに聞え給ハず。月ごろかた〴〵におぼしなやめる御事、うけ給ハりながら、春のころほひより、れいもわづらひ侍るみだりかくびやう、おこりわづらひて、はか〴〵しうふミたつる事も侍らで、しづみてなん、内などにもまいらず、こもり侍る。朱雀院の御よハひたり給ふとしなり。人よりさきにかぞへつかうまつるべきよし、ちじのおとゞ思ひをよぴ申されしを、かうぶりをかけ、くるまをおしまずすてゝし身にて、〈70ウ〉すゝみつかうまつらんに、つく所なし。下らうなりとも、おなじことふかき所侍らん。その心ざし御らんぜられよ、と申さるゝ事侍りしかバ、やまひをたすけてまいりて侍し。いまハかすかなるさまにおぼしすまして、いかめし御よそひをまちうけさせ給ハん事ハ、ねがハしくもおぼすまじく見たてまつりし。ことそがせ給て、しづかならん御物がたり、御ねがひにかなハせ給ハん、と申給へる也。「ミだりかくびやう」とハ、脚氣に血氣みだれあひたると也。又おちばのミやのし給し御かを内府のし給しやうにかしハ木いひなし給ひたるを、らうありと源氏おぼす也。労劫ありとおぼす也。「つく所なう」とハ、致仕し給てのちハ、つくべきざしきなき也。「かうぶりかけ」、引、七十老致仕懸其所レ仕之車置ニ諸廟。「かうぶり」ハ、くらゐをいふ也。「春のころよりわづらひし」とハ、女三のミやにあひ給しハ四月なれば、それをまぎらハさんの心に春よりわづらひしとの給へる也。〈71オ〉

一、いかめしくきゝし御賀を、女二の宮の御かたざまにハいひなさで、内府のし給ひたるやうにかしハ木いひなしたるを、労ありと源氏おぼす也。

一、たゞかくなん。ことそぎたるを、よ人ハあさくみるべきを、さハいへど、かしハ木心えて物せらるゝに、と源氏よくとりなさるゝとの給ふ也。

一、「されば」とハ、かしハ木さればかく物の心得ていはんと源氏おぼす也。「さハいへど」ゝハ、かしハ木密契してをろかなるとハおもへども、物の心えたるかたハ労劫いりたると也。「大将ハ、おほやけがたハ、やう〳〵」とハ、夕ぎりハ、きんちうの宮づかへなどハ労劫入給ひたれど、つゐせうなどいひ物なれたるかたハ、もとより心にしミ給ハねば、と源氏おぼしたる也。

一、「かの院、なに事にも」とハ、朱雀院、楽のかたの事御心とゞめて、しりとゝのへ給へば、よをおぼしすてつるやうなれ、といましもしづかにきこしめすべければ、心づかひせらるべき。夕ぎりとも

ろともに、まひのわらハべの〈71ウ〉ようい、くハへ給へ、との給ふ也。物の師ハ、わがたてたることばかりをこのミて、くちおしきこともあるを、と源氏の給ふ也。うれしき物から、くるしければ、ことずくなにて、此御まへをとくたちいで、とかしハ木れいのやうにこまやかにもあらで、すべりいで給ぬる也。

一、「ひんがしのおとゞにて」とハ、花ちる里の御かたにて、夕ぎりのつくろひいだし給ふ楽人まひ人のさうぞくに、又ゝかしハ木をこなひくハへ給ふ事どもあるを、げに此ミちハいとふかく物し給ふ、とみえたると也。

一、けふハ心ミの日なれど、御かたぐ〳〵物ミ給はんにとて、み所ありてさうぞくを色〳〵つくし給ふの心也。御賀の日ハ、あかつきしらつるばミに、ゑびぞめのしたがさねをきるべし。「あかきしらつるばミ」は、櫨と茜にてそむる也。「えびぞめ」ハ、あかむらさき也。けふハ、あを色にすわうがさね、楽人三十人、けふはしらがさねをきる也。たつミのかたのつりどのにつゞきたる〈72オ〉らうを楽屋にして、山のみなミのそばより御前にいづるほど、仙遊霞といふ物あそびて、「春のとなりちかく」、引哥、冬ながら春のとなりのちかければ中がきよりぞ花はちりける、「梅のほゝゑミ」、引哥、にほハねどほゝゑむ梅の花をこそわれもおかしとおりてかざゝめ、

一、ひさしのみすのうちに源氏ハおハしませば、式部卿のミや、右のおとゞばかりさぶらひ給ふ也。「式部卿」ハ、紫上のちゝ也。「右のおとゞ」ハ、ひげくろ也。そのほかの上達部ハすのこにおハします也。「御あるじ」とハ、一こんなどまいらせ給へるも、けちかくしなしたる也。けだかくハなきを、けちかきといへる也。右のおほいどのゝ四郎ぎミ、大将殿の三郎ぎミ、兵部卿のミやのそんわうのきんだちふたり、まんざいらくまひ給へる也。「そんわう」とは、親王の御子をいへる也。孫王也。「四人ながら」とハ、まんざいらくまひ給しきんだち也。〈72ウ〉

一、「式部卿宮の兵衛督」、むらさきのうへの御あに也。いまハ源中納言也。夕ぎりの藤内侍のはらの次郎、わうじやうといへるをまひ給ふ也。みぎのおほいどのゝ三郎ぎミ、れうわうまひ給ふ也。夕ぎりの太郎ぎミ、らくそんまひ給ふ也。「おなじ御中らひのきんだち」とは、みな源氏のしたしき御中のきんだちまひ給へる也。

一、くれゆけば、みすまきあげさせて、うつくしき御まごのきんだちのかたちを、いづれをもいとすぐれてらうたしとおぼす。おひ給へるかんだちめハ、みななミだおとし給ふ也。式部卿のミやもなき給ふ也。

一、「あるじの院」とハ、源氏、えひなきこそとゞめられね、ゑもんのかミ心とゞめてほゝゑまるゝ、いと心はづかしや。さかさまにゆかぬとし月よ。おひえのがれぬわざなりとて、うちミやり給ふ。「さかさまにゆかぬ」、引哥、さかさまにとしもゆかなんとりもあへず過る月日やともにかへると、〈73オ〉

一、人よりにけにまめだちくつして、心ちもいとなやましければ、かしは木いミじき事もめもとまらぬに、源氏人をさしわきてそらゑひをし給て、かくの給ふを、いとゞむねつぶれて、さかづきのめぐりくるもかしらいたきに、けしきばかりうけてまぎらハすを、源氏とがめいで給て、もたせながらたびぐ〳〵しゐ給ふに、はしたなくて、もてわづらひ給ふ。かしは木のさま、なべての人にゝずおかしきと源氏ミ給ふ也。

一、心ちかきみだりてたへがたさに、まだことはてぬに、かしは木まかで給ふまゝに、いたくまどひて、れいのやうなるをどろ〳〵しきゑひにもあらぬを、いかなればかゝるらん、と物を思ひつるに、けののぼりぬるにや、いとさいふばかりの心よハさとハおぼえぬを、といふかひなくミづから思ひしらる。やがていといたくわづらひ給

へば、内府、はゝきたのかたおぼしさハぎて、よそ〳〵にてハおぼつかなしとて、とのにわたしたてまつり給ふを、一条〈73ウ〉の女二の宮のおぼしたるさま、いと心ぐるし、とかしは木おぼして、ことなくて過すべき月日は、心のどかにてあひなだのミして、いとしもふかゝらぬ心ざしなれど、いまハとおちの宮にわかれ奉るべきかどでにもやとおもへば、あハれなると也。引哥、かりそめのゆきかひぢとぞおもほえしいまハかどでのかぎりなりけり、女二のミやをくれておぼしなげかん事のかたじけなきと、いミじうおもふ。「はゝミやす所も」とハ、女二の宮の御はゝも、いみじうなげき給て、おやをばさる物にをきて、夫婦の中こそ、とあるおりもかゝるおりも、はなれ給ハぬれいの事なれば、女二の宮ひきわかれ給て、たいらかになり給ハんまで、過し給ハんが心づくしなるべきと、こゝにてしバし心ミ給へ、とかしは木の御かたハらに木丁ばかりへだてゝ見奉り給ふ也。

一、ことハりや。かずならぬ身にてをよびがたき御中に、なまじゐにゆる〈74オ〉されたてまつりしるしにハ、ながくよにありて、すこし人とひとしきけぢめもみえ奉るやうもやとこそおもふ給へつれ、とてなき給ふ。いまハかくなり侍れば、ふかき心ざしだに御らんじはてられぬをのミおもふ給ふるに、いきとまりがたき心ちにも、えゆきやるまじくおもふ給へらるゝとて、かしは木はかたミになき給ふ。「かたミ」は、たがひに也。

一、「とみにもえわたり給ハねば」とハ、内府のかたへ、かしは木にわかにもえわたらねば、又はゝきたのかた、うしろめたくおぼして、などか、まづみえんとはおもひ給ハぬ。われハ、心ちれいならぬ時ハ、あまたの子の中にとりわきて、ゆかしくもたのもしくもこそおもへ、かくおぼつかなき事、とうらみ給ふも、又ことハりにて、「人よりさきなるけぢにや」とハ、はらからの中のこのかミなるゆへや、とりわきはゝきたかたを思ひならひたるに、いまハなをかなしうし給て、しバしもみえぬをくるしき物にはゝきた〈74ウ〉かたもおぼさるゝに、心ちのかくかぎりのおりしもみえたてまつらざらんも、つミぶかくいぶせかるべし。いまハとたのミなくきかせたまハゞ、いとしのびてわたりて御らんぜよ。かならずたいめん給ハらん。あやしくたゆくをろかなる本上にて、ことにふれてをろかにおぼさるゝ事ありつらんこそ、くやしく侍れ、となく〳〵わたり給ぬ。

一、宮はとまり給て、いふかたなくおぼしこがれたる也。

一、大とのにハまちうけて、よろづにさハぎ給ふ。さるハ、たちまちにをどろ〳〵しき御心ちにもあらず、月ごろ物などもまいらず、はかなきかうじなどをだにふれ給ハねば、たゞやう〳〵物にひきいるゝやうにぞみえ給ふ。さる時のいうそくのかくおハしませば、よの中におしミあたらしがらぬ人なし。内よりも冷泉よりも、御とぶらひしば〳〵聞え給つゝ、いミじくおぼしめしたるにも、いとゞしきおやたちの心まどふ也。〈75オ〉

一、「六条院にも、いとくちおし」と、源氏も、おぼしをどろきて、御とぶらひたび〳〵ねんごろに内府にもきこえ給ふ。夕ぎりは、ましてよき御中なれば、けちかく物し給ひつゝ、なげき給ふ。

一、御賀は廿五日になりにけり。かゝる時のやんごとなきかんだちめのおもくわづらひ給ふに、おやはらからあまたの御中らひのなげきしほれ給へるころほひにて、物すさまじきやうなれど、つぎ〳〵にとゞこほりつるだにあるを、さてやむまじき事なれバ、いかでかおぼしとゞまらん。女三の宮の御心のうちをぞいとをしくおもひきこえさせ給ふ。れいの五十寺のミずきやう、又かのおハしますみてらにも、まかびるさなの。五十寺御賀の諷誦年齢のかずをもちい給ふれいなり。「摩訶毘盧遮那」とハ、とりわきて仁和寺にミずきやうありといふ心也。「まかびるさな」ハ、大日如来也。〈75ウ〉